

研究の背景・目的

道内における人工林の樹種別齢級別面積では、カラマツやトドマツは7～13齢級が主体で成熟期を迎えている反面、担い手不足を中心とした課題に直面し、これらの貴重な資源を十分に利用できない可能性があります。

そのため、私たちは北海道が積極的に推進している「木育」を課題解決ためのキーワードに設定し、木育を通じて森林・林業に対する道民の理解を深めることができれば、道産材の利用促進に繋がり、将来的には森林・林業に関わる担い手確保へなるのではないかと考え、活動をスタートしました。

研究の内容・成果

活動を始めるにあたり、フレームワークの一つである「ロジックツリー法」を用いて、岩見沢農業高校のある空知に木育を根付かせるためのターゲットと活動内容を検討しました。協議の結果幼少期のうちから森林や樹木、木材に触れることで森林に対する親しみや感性を育むことができ、将来的に森林に理解のある人材を生み出せるのではないかと結論に達しました。

それを踏まえ、今年度は岩見沢市内にある日の出保育園様にご協力をいただき、年長クラス21名を対象とした木育を開催することにしました。木育を実施するにあたり計画立案には保育所保育指針に基づき、「やり遂げる喜びや自信を持つことができるように配慮すること」を体験のポイントに設定し使用する木材を保育園児が身近で確認できる樹木を活用することにしました。

私たちが実践する木育の通じた学びの観点を3つです。知識として吸収することのできる「学び」、体を使い楽しむことのできる「遊び」、気づきから存在を認めていく「親しみ」と決め体験と学習を両立しながらの活動を行いました。

その他にも、「体験する園児の心理的变化を検証することで、より効果的に木育につながるのではないかと」という仮説を立て、お絵描きを通じた心理評価・分析を行うことにしました。検査の方法は限られた回数でも容易に評価が可能な「バウムテスト」です。この検査は、対象となる人物が無意識に描く一本の木を情報源に評価する手法となるため、初回と最終回にお絵描きを行い、変化の差を見ることにしました。園児21名を1から番号順に仮称を付し、初回に描いたものをS、最終回に描いたものをGと整理。全61項目に適合したものを抽出する方法で行いました。

今後の展開

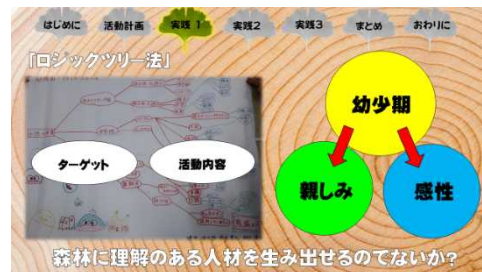
今年度の成果をまとめると、①市内保育園のご協力のもと、継続した木育を実践することができた。②木育がもたらす心理的効果について調査を行い、今後の木育を深化させるための貴重な情報を収集することができた。③月形演習林内の林道整備に取り組んだことで、将来的な木育資材を確保するため、効率的な木材搬出を期待できる環境を整えることができた、の三点が挙げられます。

次年度は、より細かな行動計画を策定するとともに、感染症の状況を見極めながら、適切な時間配分の改善を図っていきます。

次世代に林業の大切さを紡ぐためのサイクルを継続させていくためには、木育を通じた林業への理解は有用な手法です。私達はこれからも、岩見沢農業高校・森林科学科の学習を通じて、地域に対して森林・林業の素晴らしさを多くの方に広めていくため、活動を進めていきます。

月別	木育活動	心理評価	演習林管理	評価・反省
4月	●			
5月	●			
6月	●			
7月			●	
8月			●	
9月			●	
10月				●
11月				●
12月				●

資料1 活動計画



資料2 体験の観点